

巨いなる 企て (下)

堀屋太一



独自の史眼でとらえた“関ヶ原”の背景！

家康暗殺未遂事件、前田利家の死、時の流れはし
だいに三成の焦燥を駆り立てていく。かくして慶
長五年六月、会津の上杉景勝の挙兵に呼応、反徳
川勢力を結集して、天下分け目の決戦に挑む！

定価980円

毎日新聞社

聞社



壺屋太一
 巨匠なる
 金工
 (下)



巨いなる企て・下

定価 九八〇円

昭和五十五年九月二十日 第一刷
昭和五十六年一月三十日 第十七刷

著者 堺屋 太一

編集人 川合多喜夫

発行人 牧内節男

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島／北
九州市小倉北区粕屋町／名古屋市市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

検印省略

巨いなる企て・(下)・目次

組織崩壊

窮鳥大志有

攻守逆転

冬の大坂

最後の機会

大戦略

天秤の針

しまりの終り

240 194 168 149 118 68 43 5

装
幀
村
上
豊

巨
い
な
る
企
て
・
下

組織崩壊

1

慶長四年（一五九九）——。三月が二度ある（旧暦の閏月がある）この年、春は遅かった。

京、大坂で桜がほころびはじめたのは、旧暦三月十日近くになった頃だ。それでも、天下の情勢は一向になごむことはなかった。

和解が成り、誓紙が交わされて一カ月余を経た。この間に前田利家が病軀をおして伏見を訪ね、徳川家康に対面した。家康もまた、近く大坂に下り利家を見舞うであろう、と発表している。本来ならこれで、伏見と大坂との間は丸く収まる所だ。だが、現実には全く違っている。これで五大老・五奉行の合議制による政治行政機能が回復すると、考える者はほとんどいない。一方の主役・前田利家の寿命が尽きようとしていることが、広く知れ渡っていたからである。

この時期、京から大坂・堺に至る各所で、天下の危機を語る者は大勢いた。

「前田大納言さまはもう長くないらしいおすなあ……」

そんなことを囁く者がいる。大抵は遠慮勝ちに声を秘めた様子をしているが、妙に人目に立つ場所を占めている。

「さよか、ほなまた一騒動でんなあ……」

相手は心配気に小首をかしげて応じる。

「そうやろなあ、加藤主計はんや黒田甲斐はんが、石田治部はんのやり方にどえろうお腹立ちやいいますよってなあ……」

「いやあ、加藤はんや黒田はんだけやおまへんでえ。浅野右京はんかて福島左衛門大夫かてでんがな。何でも十人もの大名方が石田はんを討つちゅうて息まいてはるといいまっせ……」

第三の男が口をはさむ。

「へえ、そらまたえらいことでんなあ。それやったら石田はんが奉行で頑張つたはる限り、天下は鎮まらんのとちやいまつか……」

二番目の男がいよいよ難しい顔をする。

「そうやなあ、大納言が抑えたはる間はええけど、あの方がのうなつたらなあ……」

最初の男が思案顔に腕を組む。

「そらそうですわ。ここまで来ては加藤はんらも引き下れまへんがな。唐・天竺まで鳴り響いた鬼上官の名がすたりますわ……」

三番目の男は楽し気に笑う。そして最後に一同が、

「石田はんも太閤様のお目にかのうたお人やから、天下第一の切れ者には違いないけど、ちと過ぎた所もおましたよってなあ……」

と締めくくる。

こんな話が、街道の茶店で、寺社の門前で、京・大坂の店の軒先で行われている。語る者たちは、行商人風であつたり、僧体であつたり、庄屋の旦那風であつたり、まちまち。

だが、その大抵は、草鞋が磨り減り、足元が汚れている。長い道を歩いている証拠だ。こうした者のほとんどは、徳川方が流した乱輩、つまり世論操作と世情混乱を目的として町に放たれた工作者なのである。

しかし、それを聞いた者の中には、この話をまたどこかで自慢たらしく語る者がいる。本人にその気がないまま徳川方の乱輩の下請けをするわけだ。とかくこの種の話はおもしろく伝わり易い。戦国乱世に生まれ育つたこの当時の人々は、合戦も斬殺もさほど恐ろしいこととは思つてはいない。この時代の人々の戦争観を、豊かさと平和主義と貪欲な生存意欲に浸り切つた戦後日本人のセンスで推測して、戦争を無闇と悲惨に描いたり庶民のなげきを叫ばれたりするのは公平な歴史家の態度ではない。戦国時代の人々は、恰も現代人が選挙戦を評するように合戦を語り、デモ隊を見るように軍列を眺めた。合戦が起こるとなれば、弁当持参で見物に出かける者も大勢いた。つまり、当時の人にとっては、戦さは退屈し過ぎの話題だったのである。

それだけに噂の広まるのは速い。勿論、話には尾ヒレもつく、想像も加わる。そしてそれが、より正確な情報の持ち主たちをも惑わせる。諸侯はいよいよ前田利家の死の近いことを確信し、その後の準備を急ぐ。加藤・黒田の家臣は我が主

君のために石田を討たねばならぬと思い、石田家の者は殿を守らねばと考える。牢人たちはシラミ取りを中止して武器の手入れをはじめ、農民の中にも天井裏に隠した槍を取り出してサビをおとす者がいる。九州・小田原の役以来十年近く、久々の戦さの聲に、よき儲け仕事と勇み立つ者も多い。そんな、騒々しさの続く三月十一日、徳川家康は伏見を発し、大坂に前田利家を見舞うことになった。先に利家が病軀をおして伏見を訪ねた答礼である。徳川は、一方において世情の混乱を増す噂をひろめつつ、他方においては和解のプログラムを予定通り進行させているのである。これができたことと自体、既に大坂方の結束が乱れていることの証拠といえる。

徳川家康は十分な警備態勢を敷いた。家康の乗った川舟の前後は、井伊直政・榊原康政両将が指揮する各三百人で固められていたし、川岸には本多忠勝麾下の六百人が騎行していた。さらに、加藤清正・池田輝政・黒田長政・福島正則ら、伏見方の大名たちが、それぞれ百、二百の部隊を率いてそのあとを追つた。合計千数百人の大ボディーガード団である。

家康はまた、細川幽斎（藤孝）を終始身近に伴つた。細川家の嫁が前田利家の娘であつたから、これは人質の意味がある。恐らく細川は、我が家の娘を徳川家に預けていたのだらう。

それでもまだ、安心しない者もいた。いや、安心できないポーズを取つて、徳川に忠勤ぶりを示そうとする者がいた、

という方が正確かも知れない。

徳川家康の川舟が天満の船着場に着くと、物陰から女駕籠がすつとんで来た。その中から転がり出たのは伊予宇和島八万石の大名、藤堂和泉守高虎である。

「実は今朝早くよりここに来て、あたりの様子をうかがってりましたんやが、怪しい動きはおませんだ。けどなお念のため、前田邸までの道々には手前共の人数を伏せとりますので、御安心下さい」

藤堂は、徳川家康に近付くことを避け、前備えの隊長・井伊直政にそれをいった。家康暗殺の謀議があるという噂もしきりに流れていたからだ。事実、それは根も葉もないことではなかったのである。

「泉州殿のいつもながらのお氣遣い痛み入る。今夜はまた世話になるがよろしく……」

家康は、藤堂を招き寄せるでもなく、近臣を通じてこれだけ伝えさせた。家康は今夜、中之島の藤堂邸に泊まるのである。

「有り難きお言葉、高虎一代の誉れにございます」

藤堂高虎はまた深々と頭を下げた。この馬面の男は、この所、徳川の密偵役を務めている。先には、大坂の大老・奉行が徳川家に問責役を送ることをいち早く内報したし、今日はまた、女駕籠に長身を隠して忍び警護の役を買って出ているのである。

へ泉州のへつらい方よ……」

加藤清正や福島正則は、流石に苦笑を禁じ得なかった。

「太閤子飼いの勇将」という誇りを持つ彼らには、天下の大名でありながら徳川家の家臣にまでべこべこ頭を下げる藤堂高虎の真似はできない。だが、この誇りがやがて、加藤や福島の家を亡ぼすことになる。それに引きかえ藤堂家は、伊勢・伊賀三十二万石の大大名として幕末まで残る。人間、何事によらず、やるからには徹底すべきものである。

前田邸での対面は、至極簡単に終わった。既に利家の肉体は対面の席に長く留まることができないほどに衰えている。

徳川家康は、短く見舞いの言葉を述べただけだったし、前田利家の方にも今更語るべきこととてなかった。

この席には、加藤清正・池田輝政・福島正則・黒田長政・藤堂高虎・有馬頼則らが徳川方として同席した。護衛役を兼ねてのことである。細川幽斎・忠興父子と浅野幸長は仲介役という形で出席した。だが、大坂方の大老・奉行の中でここに同席した者はいなかった。この席はあくまでも、家康・利家の対面という形で行われたのであり、伏見方・大坂方の和解・懇親といえるようなものではなかったのである。

それだけに、一方の主役・前田利家の寿命が尽きようとしている有り様では、この行事の政治的効果も薄かった。それでも利家は、最後のはかない努力を試みた。せめても今一度の言質を家康から取っておこうとしたのである。

その夜、浅野幸長が利家の近臣・徳山五兵衛を伴って藤堂

邸を訪ね、徳川家康に対して、

「このように相互の対面も終わつた上は、大納言なきあとも前田家に隔意ない旨を書いた御誓詞を賜りますよう
に……」

と要請した。

「いわずもがなのことじゃ。わしが前田家に対して悪意を持つ
とうはずがないわ……」

徳川家康は、ごく自然にそういつたが、誓詞のことについて、

「今は旅先、わしも疲れておるで、追つて伏見よりお届けいた
たそう……」

と答えただけだった。

浅野幸長と徳山五兵衛は、

「大納言の病状は明日をも知れず、内府殿の誓詞を得て心安
らかに死なせたく存じますんで……」

と、喰い下つた。だが、家康は、

「いやいや、わしが今日お見受けした所では、大納言の御
命はまだ心配ないと思うが……」
と、話をはぐらかしてしまつた。

「そうは申されても……」

浅野幸長が一膝乗り出した時、

「右京大夫殿、もうええやおませんか……」

と遮つた者がいた。有馬頼則である。

「内府殿のお言葉に相違があつたためしがおましたか。伏見

より届けると申されたのに、それを覚束なく思われるんなら、たとえ今ここで誓詞をお書き下されてもおお疑いになりますやろ。お心を信ぜずして誓詞をもろても何になり
ま……」

僧体の有馬は、説教風に言葉巧みに説いた。勿論これは、
徳川への忠義だてである。

宗教心の薄い現実政治家・徳川家康の誓詞など何の効果もないことは、家康が太閤に出した何十枚もの誓詞がごとく無効となつたことを見るまでもなく分かりきつてゐる。だが、それすら書かぬとなればなおさら問題だ。まるで、

「前田家に悪意を持たんといえんぞ」

と、念を押されたようなものである。

しかし、こうまでいわれては、浅野幸長も徳山五兵衛も無理強いではない。二人は、

「何とぞよろしく……」

と頭を下げて退席した。案の定、伏見から誓詞が届けられることはなかった。徳川家康はこの時既に、他日、前田家を処罰する決心をしていたのであろう。

2

浅野幸長と徳山五兵衛が、不安な思いで藤堂邸を去つた頃、二キロほど離れた小西行長邸の裏口を、頭巾で顔を隠した男がすべり込んでいった。彼・石田治部少輔三成である。
へ何人來とるかなあ……」

彼は、それが気になった。今朝、同僚の奉行たちに、「今夜、奉行の集まりを小西摂津守の邸でやりたい」と申し入れてある。それだけいえば、みなおおよそ察しがつくはずだ。

通常の仕事の話なら、大坂城内の奉行部屋で済む。単なる社交なら自分の邸に招けばよい。それを敢て、奉行でもない小西行長の邸としたのは、人目を避けての密会を意味する。徳川家康が大坂に泊まる今夜、反徳川の急先峰ともいえる小西の邸で密会するとなれば、只事ではない。この会合には、奉行たちの心底をさぐる「踏み絵」の意味もあった。

へ二人来とればまずまず、悪くすれば一人だけかも……
彼はそんな風に考えていた。一人とは長束正家であり、二人とすれば長束と増田長盛である。いっく者の長束は、太閤の死後も終始彼と言動を共にし、徳川を恐れる所がない。それに比べて増田の方は、心情的には彼の同志だが、行動の上では、ためらいが目立つ。

あとの二人、前田玄以と浅野長政は、全くあてにならない。露骨に徳川に媚びている浅野は来るとは思えないし、前田玄以の態度も今一つはつきりしない。だが、浅野や前田の欠席はさして重要ではない、と彼は考えていた。この実力主義者の能吏の眼中には、五奉行といっても実質は増田と長束、それに自分の三人しかなかったのだ。

事実、ここ十年、豊臣政権の政治、行政の実際は、石田・増田・長束の三人が取りしきって来た。彼・石田三成は、太閤の側近として天下の枢機に参画し、重要事項のほとんどを

中心となつて処理して来た。増田は庶政万々を担当して日々の業務を遅滞なく片付けた。長束は経理一切を司り、朝鮮の役から諸城建造に至る出費を捻出して、なお財政に欠くことをなからしめていた。社長室長兼企画部長に当たる彼・石田三成と、総務部長格の増田長盛、財務部長といえる長束正家、この三人が豊臣政権という大企業体の本社機能を支えているわけだ。

それに比べて、前田玄以は京都奉行兼公家・寺社担当、いわば京都支店長兼特殊事業本部長といった役目であり、浅野長政は太閤の縁者（夫人同士が姉妹）というので奉行の地位を得た、いわば無任所取締役のような役割でしかない。それよりはむしろ、外交・貿易を担当する小西行長や計数と行政に明るい大谷吉継らの方こそ天下の枢機を語るに足る相手だ、と彼は思っていた。

「三人来てる……」

彼が小西邸の裏玄関に入ると、出迎えた行長は楽し気に三本の指を立てていった。

「浅野弾正少弼だけが、前田大納言のところに用があるとかで断つて来たけど、あとは揃うてる」

「はお、徳善院も来てんのか……」

彼は、片頬をゆるめた。

へ我ら奉行の結束は以外に固い……

という思いと、

へあれを持ち出すのにはちようどええ……

という考えとが同時に湧いて来た。「あれ」とは、徳川家康襲撃のことである。

「不幸なことだが、前田大納言の再起は最早覚束かん。この上は、大納言より先に内府をなきものにする以外、豊家の天下をお守りする方法はもうなかった。それには今夜、藤堂邸を焼き打ちして一挙に内府の首級をいただくのが一番やと思う」

彼は、そう切り出した。

我々五人が大坂に持つ兵力千二百で、三方から押し寄せ、鉄砲を乱射し火をかければ、徳川家康は必ず飛び出して来る。その間に、同志の大名三、四名にも兵を出させて遁走路に伏せ挟撃の形にすれば、必ず家康の首級を上げることができらう。そう彼は説明した。石田家筆頭家老・島左近の練り上げた作戦である。この当時の市街と住宅の構造は守るに難く攻めるに易い。そこを突いて奇襲の効果を上げようというものである。

二ヵ月前、豊臣秀頼を送って大坂に来た徳川家康が、宿舎の片桐貞隆邸に曲者が侵入したと称して伏見に走った時には、

「内府を襲う者などいようはずもないのに……」

と笑っていた彼が、今は自からそれをしようと提唱しているのだ。この二ヵ月間の情勢変化はそれほど著しい。前田利家の生命が尽きようとしているからである。

「誠に良策」

と手を打ったのは、小西行長である。

「先日より延々と相談ばかりしておるが何の益にもなつたらん。内府を討つのは今夜藤堂邸を焼き打ちするか、明日の帰路を襲うか二つに一つと思つておったが、只今の治部殿の策、誠に当を得ておる。今からすぐにかかるやおませんか……」

しかし、前田玄以は、

「さて、どうかなあ、今、秀頼様のお膝元で騒ぎを起こすのは……」

と小首をひねった。

「内府殿は用心深いお方やさかい、旅先でも警備は十分にしておられますやろ。それに藤堂邸には大勢の大名たちが駆けつけて守っていると聞く。隣りのわしの婿の堀尾忠氏（吉晴の子）の邸にも内府警護のために大名たちが来ておるほどや。そう簡単には参りませんでえ」

前田は至極常識的な兵力論を唱えた上、

「右衛門殿はどない思ひはりますか……」

と、増田長盛の意見を求めた。

「わしも徳善院殿に同意じゃな……」

増田は、強く応じた。

「いったい、治部はえろうお急ぎの様子じゃが、内府殿も和議に応じられたんやから、今少々そのやり方を見た方がええと思う。内府の逆心が明らかになったら、その時こそ徳川の非を鳴らして天下の義軍を起こして討伐すればええやおませ

んか。今、輕率に事を起こしては秀頼様の御為にもならず、かえって謀叛人の汚名を着ることになりますぞ……」

増田はそういったあとでさらに、

「実はこのことについては、先日大谷刑部とも話し合うたんですけど、刑部も同じ御意見でしたわ」

とつけ加えた。

ここで大谷刑部少輔吉繼の名が出たことは注目してよい。

たった五万石の小身大名・大谷吉繼の意見が大いに重視されている所に、彼ら奉行衆の官僚的考え方が現われているように思える。

「いやいや、それは甘い……」

小西は激しく反論した。今にして徳川家康を討たねば、利家公の死後はますます徳川の勢いが強まり、たとえ家康の逆心が明らかになってもどうしようもなくなってしまうだろう。それに反して、今、家康さえ討ちとれば、残党退治など台風一過、草の折れ伏すように何の造作もなくできるだろう。——そう小西はまぐし立てた。

「摂津守の申す通りや……」

彼はまた、天下の動向を説き、奇襲の利を唱えた。多少の危険はあっても座して徳川の天下篡奪を待つよりはましだとさえいつてみた。

だが、前田玄以と増田長盛の二人は、首を横に振った。

「そう簡単に成功するとは思えん。もし失敗したら、我らの志は天下に知られず、謀叛人の汚名が末代に残る。それが無

念ですわい……」

前田民部卿法印玄以は涙を流さんばかりに止めた。

「徳善院の申される通りや」

増田右衛門尉長盛もこれに同調して繰り返した。

「慌てて事を起こしたら屹度後悔することになりませ……」

「いや、今なら成功しま……」

彼は反論した。鉄砲を乱射し火をかければ、堀も櫓もない町中の邸など、いかに警護の人数が多くとも、守り切れるものではないといい、さらに宇喜多秀家、上杉景勝、立花宗茂、佐竹義宣、原信胤らも同調して呉れるであろうから、二刻を出すして三千が動員できるとも、付け加えた。

だが、前田、増田両名は、これにも異論を唱えた。

「それは簡単に参らん……」

というのである。徳川家康は歴戦の勇将、むざむざ討たれる男ではない。備えもあれば逃げ場も考えているだろう、その上、戦さが長引くと必ず伏見より徳川方の大軍が救援に来て、我方敗戦になるに違いない。それほど危険を冒して、和解の成った今、急いで戦さを仕掛けることはないではないか、というのだ。

議論は二対二の対立のまま果てることがなかった。恐らくこの時双方の目算には、表面上の発言ほどの違いはなかったことだろう。

彼と小西行長とは、口では絶対成功すると主張していた

が、内心は成功率六割ぐらいとみていただろうし、前田、増田も屹度失敗するといいなから三、四割の成功の可能性は考えていたに違いない。奉行といえども戦国大名だから、みな一応の軍事知識と戦術論の心得はある。

議論の対立は、基本的な情勢判断と思想の違いにある。前田や増田は、徳川家康の腹をまだそれほど危険なものとは思っていないかった。その上、前田玄以は、徳川の天下になってからも耐え難いとは考えていない。事実、この老人は、関ヶ原合戦のあとでも生き残り、家産を子に伝えることができた。但し、その子・茂勝は慶長十三年、豊臣家の滅亡以前に、発狂を理由に除封されている。その点、増田長盛は豊臣家に対する忠誠心の強い男だった。この奉行が、これから十五年後に示した最期の節操は哀れにもさわやかである。だが、この時点では豊臣〓反徳川の力を過大評価し、そう簡単に豊臣家が滅ぼされることはあるまい、と考えていたらしい。その点、増田には加藤清正や福島正則と同じ人の好きがあったといえる。

これに対して、彼・石田三成や小西行長は、前田利家の死と共に急速に徳川の専横が強まることを見抜いていた。だから、彼らには、「座して滅亡を待つよりは乾坤一擲の勝負を」の気持ちが強かったのだ。あるいは、たとえ家康を取り逃がしてもここで乱戦に持ち込む方がまだしも有利だ、と見ていたのかも知れない。つまり、口では「成功間違いなし」と主張している彼や小西の方が、基本的情勢判断においては悲観

的だったわけだ。

しかし、双方ともこの基本問題を深くは触れなかった。それを持ち出すと、相互に個人的な「立場の違い」を突つき合うことになると恐れたからだ。慶長四年三月十一日のこの時点では、彼・石田三成や小西行長は、加藤清正、黒田長政らと激しく訴訟争いを演じており、最早後退できない形になっていたが、前田玄以や増田長盛はそれほど切羽つまった状態ではなかったのである。

「どうやら、今日の所は襲撃までは無理らしい……」

時間が経過するに従って、彼はそう思いはじめた。そもそもの作戦は、短兵急な奇襲を成功の条件としている。それなのに、半刻（約一時間）以上も論議に費やしているのでは成功の可能性は薄れるばかりだ。彼らがこの邸に入ったことは、徳川方の隠密によって既に藤堂邸に通報されているかも知れないのである。

「兵馬のことは機を逃さんのが第一。まず殿と小西摂津殿とでやりなはれ。そしたら、増田右衛門殿も長束太藏殿も止むなくついて来やりますかな……」

と、せがむようにいった島左近の半白の髯面がチラリと脳裡に浮かんた。だが、同時に、

「へまあ、ええ……」

という気も彼にはあった。たとえ襲撃が実行されなくとも、今日ここに五人が集まり、それを討議したこと自体、重大な実績になる。これによって、少なくともこの五人の結束

は確認されたわけであり、これが世間に知れば諸侯の動きを牽制する効果を持つ。そんな風に彼は考えていたのである。

そんな時、これまで黙っていた長束正家が妥協案ともいえるものを提出した。

「お互い、かような議論に時を費やしておっても仕様がな
い。先程ここに来る途中、藤堂邸の様子をさぐらせに人をや
りましたさかいに、おつけ報告に来ますやろ。それを聞いて、
隙がありそうなら襲いまひよ。けど、警護が厳重で成功
しそうになかったら止めときまひよや」

というのだ。いかにも経理担当者らしい計算ずくの話である。

「なるほど。流石に大蔵大輔殿は手廻しがええ……」

増田がすぐこれに賛成した。

「そうやなあ、相手の様子によって決めるのも一案や……」

続いて彼が、消極的ながらも、これを支持した。それでも、小西と前田はなおそれぞれの自説に固執したが、既に大勢は決まっていた。長束正家の遺わした者たちが持つて来た報告は、予想通り、

「大勢の大名方が藤堂邸に詰めており、中之島一帯は兵馬であふれている」

というものだったからである。

一方、この夜の藤堂邸は大変な騒ぎだった。徳川家自身の

警備隊のほかに、細川忠興、加藤清正、黒田長政、福島正則、池田輝政、堀尾吉晴など錚々たる武将がそれぞれ兵を率いて詰めかけており、藤堂邸に入り切らない人数が近隣の大名邸から川岸の空き地にまであふれていた。邸の主・藤堂高虎の如きは、邸全部を徳川家の者に提供し、自らは甲冑に身を固めて夜通し諸方を見廻って明かしたほどである。

しかし、だからといって、この夜の徳川家康が全く安全だったとは限らない。当時の都市構造や住宅構造からみて、いくら大勢の守備隊がいたとしても、乱戦の中で藤堂邸を火災から防げたかどうかは疑問である。また、これを契機として、大きな戦さがはじまっていたとしたら、諸侯がどう動いたかも分からない。

それ故、この夜の論争において、彼・石田三成や小西行長が主張した急襲成功の見通しが正しかったか、前田玄以や増田長盛の失敗予想が当たっていたかは分からない。いずれにしろ、この点を深く穿鑿するのは無意味である。歴史においては、「もしも」は禁句なのだ。

だが、一つだけ確かなことがある。より長期的な情勢分析においては、彼や小西行長の悲観的評価の方が、前田、増田の楽観論より正確だったことである。それは、あとの歴史が証明している。この夜、小西邸に集まった五人のうち、三人は一年後に生命を奪われ、首を曝される。一人は流刑となりやがて切腹する。そして彼らが擁護しようとしていた豊臣政権とその幼弱の主君・秀頼も滅ぶことになるのである。

しかし、それはまだ先のことだ。この夜の段階では、彼もまだそれを、確信を持っていえるほどの予見力は持っていなかった。恐らく彼は、自ら主張した奇襲が中止されたことに六分の落胆と四分の安堵を感じていたことだろう。人間誰しも、決定的瞬間を先に延ばしたいという気持ちがある。それ故、小西邸から帰った彼の表情は、むしろ明るく間伸びしたものになっていた。

「殿は、やっぱりお役人でござるなあ……」

そんな彼に、島左近はこんな文句を浴びせた。「お役人」という言葉は、この際「文吏」と置きかえてもよい。つまり「武人ではない」という意味である。短兵急な奇襲作戦を、敢て奉行会議などにかけた彼の組織重視主義を皮肉ったものだ。

それは、生涯、帷幕の能吏として働きながらも、常に武功に憧れ、勇気ある男たることを示したがっていた彼にとつては、耳の痛い批判だった。だが、彼は、

「左近、そういうなあ……」

と、苦笑しただけだった。彼自身、自ら造り上げた組織の決定手続の面倒さと、それを引きずって行くことの手間とに疲れ果てていたが、十九万四千石の身代では組織に頼る以外に手はなかったのだ。五奉行中第一の切れ者として所掌して来た行政上の権限と北近江四郡の大名という身分との間には大きな落差があったのである。

その意味で彼・石田三成は、後世の多くの人々が悩まされ

ることになる組織というものの鈍重さ、つまり「官僚主義のコスト」を味わった日本最初の人物だったかも知れない。

「何事も運命よ、そう思うて呉れ……」

彼は、島左近の髯面にそっくり残して奥に入った。久し振りで、初芽の肉体を求めたい気分になっていたのだ……。

3

「チャンスのあとにピンチあり」

これは野球解説で聞き慣れた格言である。彼は、天下の政権と我が生命をかけた巨大なゲームの中で、それを味わった。徳川家康を襲撃するチャンスを見逃したあとには、彼自身のピンチが次々と襲って来たのである。

まずそれは、例によって巷の噂からはじまった。

「石田治部少輔と小西摂津守が、藤堂邸を襲撃し、徳川内府殿を討とうとしていた……」

という噂が、京・伏見・大坂の街にぱつと広まった。事実無根のことではない。だが、そのあとは、語る者、語られる所によってそれぞれに違っていた。ある者は、

「藤堂邸には加藤主計頭（清正）、細川越中守（忠興）はじめ、福島殿、池田殿、黒田殿らがお詰めになっておられたので治部少も摂津も手を出せなんだんや……」

という。他の者は、

「いや、それもあるけど、増田右衛門尉と前田民部卿がお止めになったのよ」